生涯学習の現場

舞台をともに創るということ~私のセカンドステージ修行

21世紀社会デザイン研究科 教授 庄司 洋子

8月1日掲載

立教セカンドステージ大学の第一幕が終わって、今は私自身が幕間のざわめきを楽しんでいるというところだろうか。開設準備段階ではどうなるかと心配していたことが、案外難なく乗り越えられたという安堵感がある一方で、全く想像できなかったような状況の展開に、自転車操業的に対処しているという側面もある。それぞれ立場が違う受講生・教員・職員が、この緊張感をしっかりと共有しているところが、現在のセカンドステージ大学の何ともいえない面白さといえるだろう。



ここで私が担当する科目は、前期・後期(通年)のゼミナールと、後期の必修科目「超高齢社会論」なので、まずは、これまでに隔週で行ってきたゼミの雰囲気を紹介してみよう。受講生は 15 名で、そのうち男性は5名だから、人数構成としてはかなり女性優位である。年齢では、50代から70代までおよそ20歳の広がりがあり、そのうちの多数を占めるのは50代の8名、いずれも女性である。



男社会を生きてきた男性たちにとっては、この集団での経験がいかなる意味を持つのかも興味深い。

このゼミでは、ゼミ生のうちほぼ半数は 4 年制大学を卒業しているが、ゼミというものを経験してきたとは限らない。また、ゼミ生は担当教員の専門分野を意識して所属ゼミ希望を出しているだろうが、4 年制大学の専門ゼミのように特定のテーマを掲げて募った集団ではない。つまり、セカンドステージ大学のゼミは、修了報告書を作成するために、受講生同士が刺激しあったり教員が助言したりする場として設定されているものである。私のゼミではそのことを強く意識して、この半期は、各自が修了報告書のテーマを設定することを課題としてレポート(発表)してもらってきた。

前期終了までに、ちょうどレポートが一巡したところでみると、ゼミ生の挙げたテーマは、私の専門分野に近い「家族・ジェンダー」に関するもの、あるいはその延長上にあるものが多かった。しかし、およそ私の専門外と言えるものもあって、その場合には私のほうが教えても

らうことになるという期待がある。そもそも、このゼミでは、ゼミ長をはじめとして、メンバーそれぞれがしっかりと役割を果たしてくれるので、 教員は何も困ることがない。かつて学部生のゼミで、笛吹けど踊らずのいわゆる「お通夜ゼミ」に苦労した経験もある私にとっては、この ゼミは正直言って申し訳ないくらいラクで楽しいのである。しかし、あまりラクチンなだけではいけないと思って、8 月の暑いさなかに、朝か らまる一日を使う特別ゼミを開講することにした。ゼミ生にとってはちょっとした試練かもしれないが、恨みは終了後のビールで流してもら えばよいと思っている。

ところで、ここでもう一つホンネを言うと、後期に担当する必修科目「超高齢社会論」のことで、今私の気持ちは穏やかでない。何よりも、 北山晴一先生ご担当の前期必修科目「現代世界論」の評判が私には相当のプレッシャーである。その授業のレベルの高さもさることながら、先生ご自身からの私への助言「庄司先生、教室に行く前には、気合を入れるために準備体操をして行ったほうがいいよ」の一言に 私は震え上がっているのである。この年齢層と多様性、しかもやる気マンマンの花を咲かせているような100名近い受講生の前で講義するというのは、並大抵のことではないことが徐々に実感されて、私にとってはまことに暑い夏なのである。

それで、自分に気合を入れるために、さまざまな場面での受講生たちの顔をもう一度具体的に思い浮かべてみた。そこで到達した結論は「誰が生徒か先生か」の「めだかの学校」のようなこのセカンドステージ大学で先生を務めるには、自分が受講生と同時代を生きたという共感を軸に据えて、この舞台を共につくる楽しみに徹するしかない、ということである。私自身がセカンドステージを生きるようになったこと、そして今まさにその修業に励んでいるのだという気持ちを、大切にしたいと思っている。



庄司 洋子(しょうじ・ようこ) 21 世紀社会デザイン研究科 教授

東京大学文学部社会学科卒業後、東京都民生局(現在の福祉保健局)勤務。同局を休職し米国留学。ハーヴァード大学教育学大学院修士課程修了(教育社会学専攻)。日本社会事業大学教授、立教大学社会学部教授、同大学院社会学研究科教授を経て、同大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授。他に放送大学客員教授、立教大学ジェンダーフォーラム所長、立教大学社会福祉研究所長などを歴任。福祉社会学会会長、日本社会学会理

事。専門は福祉社会学、家族社会学、ジェンダー論など。